

APTT凝固波形解析からLAの存在を早期に予測しえたSLEの一例（第2報）

◎関 恵理奈¹⁾、谷淵 将規¹⁾、鈴木 志宜¹⁾、柴井 崇史¹⁾、中野 翔太¹⁾、並木 郁乃¹⁾、海老澤 和俊²⁾、
竹内 隆浩²⁾
静岡済生会総合病院¹⁾、静岡済生会総合病院 血液内科²⁾

【はじめに】

凝固波形解析（clot waveform analysis：CWA）は、凝固のフィブリン形成過程を波形として評価した検査技術である。凝固波形という“質的評価”には、凝固時間という“量的評価”の異常の原因が反映されることがあり、特にループスアンチコアグラント(LA)によるAPTT延長では、ショルダータイプの特徴的な波形をとることが報告されている。全身性エリテマトーデス(SLE)は特徴的な皮疹、関節痛に加え腎炎、中枢神経障害などさまざまな症状を呈する自己免疫疾患である。一部の症例ではLA陽性となり、血栓症リスクの上昇と関連することが報告されている。そのためSLEの症例ではLAの検索が必要であるが、我々はSLEが疑われる患者において、APTTのCWA(AC)からLAの存在を疑い、実際にLAを同定しえた症例を経験した。

【症例】

30歳男性。前医より体調不良の継続にて当院血液内科外来に紹介受診となった。出血傾向は認めなかった。

【血液検査所見】

血液算定は、白血球数 $1.58 \times 10^9/L$ 、赤血球数 $3.97 \times 10^{12}/L$ 、Hb $12.1g/dL$ 、血小板数 $262 \times 10^9/L$ であった。凝固検査は、PT 14.1 秒、APTT 127.1 秒、Fib $352mg/dL$ 、FDP $2.5\mu g/mL$ 以下、Dダイマー $0.8\mu g/mL$ でAPTTの単独異常延長を認めた。ACはショルダータイプの波形異常を呈した。APTTクロスミキシング試験は非特異的な結果であり判定不能、凝固第Ⅷ因子97%、凝固第Ⅸ因子70%、フォン・ウィルブランド因子125%、ループスアンチコアグラント(LA)2.4、抗カルジオリピン・ $\beta 2GPI$ 複合体抗体(aCL- $\beta 2GPI$) $96.0U/mL$ 、抗核抗体160倍、抗ds-DNAIgG抗体 $119IU/mL$ 、抗ss-DNAIgG抗体 $119IU/mL$ であった。

【経過】

上記所見からLA陽性のSLEと診断され、SLEに活動性を認めたため入院にてプレドニゾン、プラケニル、ベリムマブの治療を開始した。治療経過は良好のため外来にて経過観察となっている。

【考察・まとめ】

APTTクロスミキシング試験では典型的なLAパターンと異なったにも関わらず、ACはLAに典型的な異常を示したことから、CWAがAPTT延長を呈する患者におけるLAのスクリーニングとして有用である可能性が示唆された。今後も、APTT凝固時間結果の異常に注視するとともにCWAの新規技術を駆使した臨床に寄与する検査結果報告に努めたい。

連絡先：054-285-6171（内線2534）